

## 陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発 (2)

中澤静男

(奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター (文化遺産教育研究部門))

中澤哲也

(奈良教育大学大学院在学)

### The second Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city

— Through a seashore dotted with pine trees “Takamatubara” and A pine tree of miracle —

Shizuo NAKAZAWA

(Center for Study of Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties, Nara University of Education)

Tetsuya NAKAZAWA

(Graduate School of Education, School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

**要旨:** 奈良教育大学は日本で一番初めにユネスコスクールに認定された大学として、持続発展教育（以下ESDとする）を指導できる教員の養成に取り組んでおり、「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトを立ち上げた。その一環として2012年9月に、教員2名、教職大学院生2名、大学院教育学研究科大学院生2名、学部生2名からなるチームで、東日本大震災津波で被災した陸前高田市において文化遺産調査を行った。調査の目的は、①文化遺産調査、②文化遺産の教材化、③防災教育であった。本稿では、②文化遺産の教材化に関わり、今回の津波被害で全滅した高田松原を取り上げ、ESDとしての教材開発を行う。具体的には高田松原についての学び、高田松原のための学び、高田松原を通した学びによって、陸前高田市の小学生が地域を大切に思う心を養うと共に、森林環境の果たす役割や人と人のつながりの大切さなどの持続可能な発展に関する価値観を身につけ、持続可能な陸前高田市の構築に参加しようという態度を育てることを目的に教材開発を行った。

**キーワード:** 持続発展教育 Education for Sustainable Development 奇跡の一本松 A pine tree of miracle 東日本大震災津波 Great East Japan Earthquake tsunami

### 1. はじめに

陸前高田市は2011年3月11日の東日本大震災津波によって、死亡者1735名、行方不明者14名（2012年10月23日現在）という、市民の約1割に及ぶ人的被害の他、海拔が低いところにあった市役所や市民体育館、市立博物館など、主要施設が被災した。

このような状況の中、2011年5月に陸前高田市在住の元新聞記者の及川征喜氏、元小学校長の佐藤文隆氏、教育委員の松坂泰盛氏から、多くのものを失った市民を元気づけたいという願いを込め、奈良教育大学（以下「本学」とする）の山岸公基教授に、残された文化遺産調査の依頼があった。この依頼を「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクトに位置付け、①

文化遺産調査、②文化遺産の教材化、③防災教育の3つのねらいを設定し、現地調査を行った。

本稿は、その中の②文化遺産の教材化として、陸前高田市にあった高田松原の教材化に取り組んだものである。東日本大震災津波によって失われた高田松原の歴史を調べたり、それが果たしていた役割を考えたりする学習や、高田松原を復興させようとして取り組んでおられる方々の思いにふれ、共感することで、次の地域社会を受け継ぐ者としての当事者意識と、持続可能な地域社会づくりに参加しようという態度を育てることができると考える。

### 2. 文化遺産を通した持続可能な発展のための教育

先進国における公害などの環境問題に端を発して、

エネルギー資源の枯渇や、食料問題、戦争、貧困、人権などの様々な地球的諸課題を解決し、持続可能な社会を構築するために、世界中で持続可能な発展のための教育（以下、ESD）の推進が求められている。日本においても、2008年改訂の学習指導要領にESDの理念が反映された。

ESDがこれまでの教育と大きく異なることは、これまでの教育が理解することに重点が置かれていたのに対して、ESDでは価値観と行動の変革がねらいとされているところである。

## 2. 1. ESDの基盤となる地域を大切に思う心

例えば、環境問題について学び、その原因が判明したとしても、行動しないと環境問題は一向に解決されない。子ども一人一人が当事者意識を持って、環境改善のために行動を起こすことが、環境問題解決の第一歩である。この地域での行動化の基盤となるのが地域を大切に思う心である。

地域に伝えられている文化遺産について学び、その価値を理解すると共に、それを大切に保護し伝えてきた先人の存在に思いをはせ、現在もその継承や価値の発信に取り組んでおられる地域人材と出会い、文化遺産に対する熱い思いを聞き取ることで、子どもの心が変わる。地域を大切にすることが育ち、持続可能な地域社会の形成に参加する態度を養うことができる。

## 2. 2. 文化遺産から学ぶ持続可能な発展に関する価値観

日本ユネスコ国内委員会（2012）は持続可能な発展に関する価値観として、人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等を例示している1)が、その多くは、文化遺産を通して学ぶことが可能である。

今回取り上げた高田松原においても、高田松原の歴史を学ぶことから、環境を尊重することや人と人のつながりの大切さを学ぶことができる。

地域を大切に思う心を養うと同時に、持続可能な発展に関する価値観を身につけることで、子どもは持続可能な地域社会づくりの担い手として、考え、行動を始める。

ESDはあらゆる教育や学びの場に取り込まれることとされており、教科や道徳、特別活動などにおいて、持続可能な発展に関する価値観を学ぶことが求められる。しかし、例えば教科には教科の目標があるため、ESDが求める行動化まではいたらないことも多くある。そこで、文化遺産を通して地域を大切に思う心を養い、持続可能な発展に関する価値観を学び、行動化までのひとまとまりの学習の機会として、総合的な学習の時間の活用は有効である。

## 3. 高田松原

陸前高田市の名勝、「高田松原」は市民からも大変愛される陸前高田市のシンボルであった。約7万本もの松が海沿いに2キロメートルにわたって続いており、高田市民はもちろん、観光客にも海水浴や、憩いの場として親しまれていた。しかし、高田松原が自然に形成されたものではなく、多くの人が植え、守ってきたものであるという事実はほとんど知られていない。高田松原は1666年に仙台藩主であった伊達綱宗が気仙郡高田村の豪商、菅野杵之助（かんのもくのすけ）に立神浜（当時の高田松原）の田畑に被害を及ぼす塩害や、強風を防ぐため、気仙郡高田村に、長さ440メートル幅220メートルに渡る松の植栽を命じたのが始まりである。翌年から、杵之助はのべ200人を動員して約6200本の松を植えた。しかし活着したのは半分程度であった。その後1673年までの7年間に、のべ672人を動員して、さらに18000本の松を植えたが、志半ばに倒れ、その子七左衛門が父の遺志を継いで完成させた。

その50年後の1724年、旧仙台領の主要金山の一つであった玉山金山を治める松坂新右衛門が、仙台藩から新たに御山林方御横目を仰せつかり、気仙川流域の新田を塩害、風害、洪水から防ぐために今泉村（陸前高田市気仙町）に松の植林を行った。

杵之助が植林した松原は「高田松原」、新右衛門が植林した松原は「今泉松原」と呼ばれていたが、1955年の町村合併によって陸前高田市となって以来、その2つを合わせて高田松原と呼ばれるようになった。

アカマツ、クロマツ約7万本が2キロメートルに渡って、海岸沿いに続いていた。しかし、この高田松原はこれまで何事もなく伝えられてきたのではない。1896年の三陸大津波、1933年の三陸大津波、1960年のチリ地震津波では海水や土砂を被り、大きな被害が出たが、その都度地元の人たちが補植し、景観が保たれてきた。高田松原は1930年に東北十景に選ばれたのを皮切りに、1940年国の名勝に指定、1958年には日本百景に、1964年陸中海岸国立公園、1986年には森林浴の森百選に選ばれるなど、陸前高田市のシンボルの存在であった。

しかし、2011年3月11日の東日本大震災津波によって高田松原は1本を残して崩壊した。残された松は奇跡の一本松としてたくさ



枯死する前の奇跡の一本松  
(2012.9.8筆者撮影)

んのメディアに取り上げられたが、やがて枯死してしまっただけでなく、現在陸前高田市ではその「奇跡の一本松」の芯の部分に樹脂を入れ、地域の活性化のシンボルに、また、津波の恐ろしさを伝えるモニュメントにしようとして取り組まれているが、未だに仮設住宅に暮らし、将来の展望も持てない市民がたくさんおられることから、大金を投じてのモニュメント化には、賛否両論ある。

#### 4. 高田松原の教材に向けて

高田松原の教材化を通して、陸前高田市の子どもたちに伝えたいことが3つある。1つ目は高田松原についての学び、2つ目は高田松原のための学び、3つ目に高田松原を通しての学びである。

##### 4. 1. 高田松原についての学び

高田松原が天然の松林ではなく、菅野空之助や松坂新右衛門が多くの人々の協力の下、新田開発のために松を植えたことがその始まりである。それまでは、高田松原は荒涼とした不毛の地であり、潮風が絶えず砂塵を吹き上げて田畑を埋めつくし、作物の収穫がないこともしばしばだったと言われる。空之助は村方と経費を負担し合って行った最初の年の植栽がうまくいかなかった翌年からは、私財を投じてクロマツを中心に18000本を植え付けた。空之助亡きあとは、子孫が代々立神御林御山守(たつがみおはやしおんやまもり)として、私財を投じて松林の保護育成に努めた。

その50年後、気仙川流域の新田を災害から守るため、私財を投じて、防潮・防風林の植栽に取りかかったのが新右衛門だった。海水が染み込んだ砂地、夏の高温、冬の凍結などの数々の悪条件にも打ち勝ち、20年の歳月をかけて数千本の松の育成に成功する。これら新田開発により、仙台藩では表向きは62万石だが、実高は100万石を越えていたと言われる。松を植えたことで、人々がどれだけ助かったのかを当時の時代背景と合わせて考えさせたい。

残念ながら松坂新右衛門の偉功を称える顕彰碑も津波に流されてしまったが、高田松原にまつわる地域の先人について学ぶことで、陸前高田市を誇りに思い、大切に思う心が育つと考える。

##### 4. 2. 高田松原のための学び

陸前高田市には高田松原を守る会がある。今回の調査を依頼された3人の方もその会員である。現在、陸前高田市は津波によって高田松原を流されただけでなく、塩害によって、海岸沿いには松が育つことができない状況になってしまった。そのような中、2012年10月10日の毎日新聞(大阪本社発行版・朝刊)に「『奇跡の一本松』後継樹展示」の記事が掲載された。住友林業筑波研究所首席研究員である中村健太郎氏が、千

本松原で津波から唯一残り、被災地に希望を与えた一本松の松ぼっくりから採取した種を発芽させ、それが約7センチの苗木にまで成長しているという記事である。高田松原を守る会の方々も、震災前に松原の松枝や松ぼっくりを使って作られていたアート作品から種を採取し、苗木を育てておられる。こういった高田松原のための取り組みをされている方々にインタビューし、高田松原や街の復興に対する思いを聞き取ることで、自分も何かしようという能動性が生まれ、学習者の行動の変革をもたらすものと考えられる。



高田松原を守る会で育てている松の苗木  
(2012.9.7筆者撮影)

##### 4. 3. 高田松原を通じた学び

さらに地域の人や保護者に、高田松原にまつわる思い出などを聞き取ることで、松林が持っていた文化的サービスに気付くことができる。森林環境は、人間社会が生態系から受けるあらゆる利益を意味する生態系サービスの基盤である。生態系サービスは次の4つに分類される。①食料や燃料などの資源を提供するサービス、②水の浄化や災害防止など、私たちが安全で快適に生活する条件を整える調節的サービス、③さまざまな喜びや楽しみ、精神的な充足を与えてくれる文化的サービス、④それらのサービスをうみだす生物群が維持されるために必要な一次生産(光合成による有機物の生産)や生物間の関係などを支える基盤的サービスである<sup>2)</sup>。

高田松原についての学びから、森林環境が人間に与えてくれるサービスを理解し、様々な森林環境を保全することの大切さに気づく契機となると考える。

#### 5. 学習活動の概要

高田松原を教材に、小学校6年生を対象とした総合的な学習の時間におけるESDの学習活動案を作成した。小学校6年生を対象としたのは、5年生の社会科の内容(1)「国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止」での学習を深めたり、発展させたりして、行動化につなげたいと考えたためである。

### 5. 1. 単元名

高田松原に込めた願い

### 5. 2. 単元の目標

- ・高田松原に関わった先人について意欲的に調べる。
- ・松原などの森林環境の果たす役割を具体的に考えると共に、高田松原の復興に取り組んでおられる方の思いを聞き取り、自分にできることを考える。
- ・現地見学やインタビュー調査など、五感を通して調べたことを効果的にまとめる。
- ・高田松原と地域の人々との関わり、震災復興への人々の願いを理解する。



津波で破壊された高田松原  
(2012.9.8筆者撮影)

### 5. 3. 評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
① 高田松原の植林し、補植し続けてきた人々に関心を持ち、意欲的に調べる。	① 植林・補植によって受け継がれた人々の願いや、思いを考える。	① 高田松原を現地調査したり、高田松原を守る会の方にインタビューしたりして、高田松原の持つ意味を効果的にまとめる。	① 菅野柰之助や松坂新右衛門や、保全活動を行ってきた地域の方々の努力と、高田松原に込められた震災復興への願いの共通点を理解する。
② 高田松原に込められた震災復興への願いを次の世代に伝えるために意欲的に参加する。	② 高田松原が津波で破壊された今、先人の思いを伝えていくにはどうすればいいか考える。  ③ 森林環境が果たしている様々な役割を具体的に考える。		

### 5. 4. 単元計画 (全10時間)

<p>1. 高田松原を知ろう。(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ、海岸沿いに高田松原があったのかを考える。</li> <li>・文政5年の高田村、今泉村の古地図をもとに、高田松原の成り立ちを話し合う。</li> </ul> <p>2. 陸前高田におられた先人を調べる。(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高田松原の歴史年表を作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災津波以前の高田松原の写真や映像により、高田松原への関心を高める。</li> <li>・高田松原が2つの松原を合わせてできたものに気付くことから、高田松原の成り立ちに対する関心を高める。</li> <li>・菅野柰之助や、松坂新右衛門の資料を提示し、高田松原がつくられた理由やその効果、またその後の保全活動について年表にまとめさせる。</li> </ul>	<p>社会的事象への関心・意欲・態度①</p> <p>社会的事象についての知識・理解①</p>
---	---	---

<p>3. 高田松原を救え！(3時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年表から、明治20年、昭和8年の三陸大津波、昭和55年のチリ地震による大津波が陸前高田を襲ったことを読み取る。</li> <li>3度の津波後の地域の人々の松原保全の取組を知る。</li> <li>高田松原を守る会の方々にインタビューし、これまでの松原保全活動と、これからの復興活動を聞き取る。</li> </ul> <p>4. 私たちの高田松原を思い出そう。(2時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高田松原は自分たちにとってどんな存在であったか考える。</li> <li>高田松原だけでなく、周囲の森林環境の役割を考える。</li> </ul> <p>5. 陸前高田市をつくっていこう。(3時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高田松原の復興と震災復興の願いを受け取る。</li> <li>住み続けたい陸前高田市をテーマにレポートや作文、絵画などを作成し、発信する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>陸前高田市の災害史年表を提示する。</li> <li>津波が松原に影響しなかった理由を考えさせる。</li> <li>高田松原を守る会の方をゲストティーチャーに招き、話を聞かせていただく。</li> <li>高田松原での家族の写真などを持ち寄せたり、家族や地域の人にインタビューさせ、高田松原を舞台とした人とのつながりの大切さに気付かせる。</li> <li>4つの生態系サービスを意識して、子どもの意見をグループ分けする。</li> <li>家族や地域の人、仮設住宅に住む人、市役所の人など、身近な人の声と高田松原を守る会の方の願いの比較から、共通する願いを明らかにさせる。</li> <li>全校生徒や家庭、地域の方などに、自分たちが考える陸前高田市を伝え、そのための第一歩を踏み出すよう、意欲化する。</li> </ul>	<p>観察・資料活用の技能①</p> <p>社会的な思考・判断・表現①</p> <p>社会的な思考・判断・表現②</p> <p>社会的な思考・判断・表現③</p> <p>社会的な事象への関心・意欲・態度②</p>
---	---	--

### 6. 終わりに

本稿では、陸前高田市における文化遺産調査における現地見学や、市民の方へのインタビューをもとに指導計画を作成した。今後、作成した指導案や資料を陸前高田市教育委員会に届け、市立小学校の総合的な学習の時間において授業実践していただくことで、陸前高田市の小学生に地域を大切にする心を育て、これからの陸前高田市の建設に参加する態度を育てていただければと思う。そして高田松原が津波によって流されてしまった今、先人から受け継がれてきた願いを次の世代に伝えるにはどうすればいいのかを考え、高田松原の代わりに、陸前高田市の子どもたちが次の世代に何を残していくのかを考え、行動するきっかけになることを願っている。

### 引用文献

- 1) 名村栄治、「名勝「高田松原」の由来」『平成23年三陸大津波 被災地からのレポートⅡ』一関プリント社、平成23年、pp.133-138
- 2) 金野静一監修、陸前高田市史編集委員会編集、『陸

前高田市史 第四巻 沿革編(下)』陸前高田市、平成8年、pp.675-679

### 注

- 1) 文部科学省国際統括官付(日本ユネスコ国内委員会事務局)『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)』、2012年、p.2
- 2) 鷺谷いづみ、『〈生物多様性〉入門』岩波書店、2010年、pp.20-21